人の契約をそむくんやと又ふ元助も理りよ伏しこゝ
の言かたゝて難こゝて命を殺すぬ中ゝ僕が恨まゝ
せんと希ハ世忠だも盡さんと世ものゝ君の為よあゝ
らんをを敢くあるべきまあ〳〵今より本望を遂ぬをん
枝を一刎手金のこゝちまて結ぐんとて言りぬさて復
雖のををゝをゝをゝ伏くよりゝ来りゝん拂曉言房が
出るを待受け一管の寒柑を搾げ拾て諸君さゝめて時
枝のをゝゝきよ渇〳〵ぬんいざまゝ〳〵せよと彼寒柑を
おゝ〳〵あゝ泉岳寺まで つきをひ行き深信〳〵ぐ別
をゝゝて言房死を賜ふまゝの間ある候よ君ゝ〳〵あり
〳〵元助が事を事よりめゝゝて涙を倍〳〵ばゝの

侯ふもその忠節義氣を感じさせ物色〳〵あま
ねく尋ねをとめられ〳〵ども終よを行方ををずと
あん少ゝ

那珂宗助

羽州秋田の家士まゝ〳〵那珂宗助とつふ人あり五刑よ熟
〳〵して常小封円北川善藤を掌りその人乃ち夫ふよ
まゝ〳〵川を後ゝを器物多製作〳〵ゝり山を毀つふ五車の
如くあるものまゝ〳〵水の流れよ二孔をうけてめゝゝすよ
瀦ゝ〳〵自然と土を埒ゝ穿つやうよセーりのあり又延一
枚を樹ふうけ〳〵激流ふひ〳〵ゝ切けばその延は何のとふく
動〳〵ふ考ゝびひて溝渠の泥砂を拂ひ除くやうよセーと

をありとやうるやうのもとぐの器をたてゆ一人多不
るの製をつくる作水の具をしく使利をなるを多しとぞ
ある年所使いつるところの川普請をせしものあるより朔
山の麓まて深山あれバそこに谷あひよ在るところ此藤り
づるを多く伐りそこ蛇籠を造るよりのをしるるぐ
色の本線十反多用のよ國衛へやつるれバ諸司の
地りつよ川普請ハ毫用れのれるいぐをやあ了れど
水利の事ハすぐくの害助ハ有せられたるとあれバいひ
出るまふ調く幸ーなるこの保害助ある村民の
子どもを集めて河原ふくにて蛇とし作る
それ中ふく力量あるものを賞ーてのを色本線を一

幅つ横巾禪ハそこそれバいよくよるこびるるぶ力を
自讃するものあれバやぐくこの児軍ハ課せて日河原
のハ石を運ぐもく蛇籠ハ結せるるどにおのくあるそ
ひ我労くくと自動くたるこれバ日あるぐして幾ぐ
くの雑費もあるを数十里の蛇籠成就せくこのほ
害助ものめぐるよあるの為の形勢あるそれるる事
石をるるくくく件の石を龍卵ハ祀りくくとやこの神祠
ハ城下より八幡とふ湊へ通ふ所ある拈葉山の頂ハ在て
土俗ハ龍卵堂とふてとぞ

南川文伯

南川文伯ハ伊勢國薦野の生れて京師ハ蔡琴ー医術

さのみく産業とするにもあらざれども治療を需る者あれどもなく
性文雅を事としく生涯拙を經て江戸に下り久津
見吉兵衛といふ人此家に寓居せりこれは明和四年の頃の
事なりし吉兵衛は三浦家の老職にて頗風流の士なり
と聞へし文伯を招きて倶に此土を知らん為とて
あまりし都下を経回経来しく至るところ何處にても水
を飲み試みてその地の美悪を辨論しるとかや又著述
するところの閑散餘録を携へて名家を訪ひ轉じ
せしめ餘録に洩れたる話説を記臆したまへるあれバ札
にしるして粘しておいたこれまでのものより帰京のころ和
ひかへの冊子に押たる佯くの話説数百條におよべりとか

かくて江戸を辞せんとしける寓居せし久津見氏に懇
に謝をのべて此程の厚情を謝するにいかなる謝儀にても
ても呈上せむと思ひ申しまを久津見氏の固辞し
たりしかバその裁足にのぞみて白木の箱一箇を贈り
けるに重さ此なる何なるものかあると訝り見ひて
蓋をひらき見るに白米三升なりあまりあり久津見氏
いかなるよしにもその意を得ずさて云やう我ハもとより米
穀にとぼしくいと文伯おもひて二升ハ一升を
是生民の命穀にあづかる物なればいと貴きを何ぞ二重
にしらんやこれまでの精米ハ予が自春たるところにて最
清潔なるものなり僕が寸志のほどを受たまへれといひ

とれん文治名ハ維遷字ハ士長ホ尊の時年五十歳あま
星耳順よをき人ありとゝ
塚原卜傳

塚原卜傳ハ常陸塚原の人なり父塚原土佐守の飯篠
長威斎ヨリ剣事しゝく天正傳をうけその子新右衛門
術槍法を授けうけてゝ世を早くせしぶるに弟卜傳兄ゞ
傳脈をその後きく諸國より修行しゝく大ヨリ名を顯ハしたり
その比野州上泉伊勢守とゝふ陰流の名祖ありく刀槍乃
達人ありト傳うけてその名を聞て野州より赴き上泉ヨリ能て
心要を究めて又ゝ此ト傳ゞ流を習ひ傳ゝるものハ将軍
義輝公ならび義昭公ヨリ昇殿ゝ傳出たり

その他列侯諸士ヨリ多ゝてハ数ゝ枚追あゝ書付ト傳ゞ威
勢さんさんゝ常ヨリ往来すゝ鷹をすゑさせ乗馬の馬を
引ゝ牽ハ者すゞゝ七八十人を引つまあり きとゝやその行粧
ひやるゞゝ一説ヨリト傳刀槍の術ヨリ達ゝ自一派を立て
手勝流と名のれりあゝ附ち本國へ下向の時ハ
矢来の後りまて乗ゝ矢来人一般よりゝゝあゝゝゞその中ヨ
年三十七八歳ゞゝ好る男長言ゝ髭ヨリて言語とあゝく
ゝゝその船中ヨリて兵法剣術の猥練熟を自ゞゝ
傍若無人のやまひあれどト傳ハ耳ヨリけず
てうち眠りつゝあゝゞあまり此過言ヨリゝゝ
てゝひゝゝハさても推さゞゝの此語を聞ものゝ多弾ヨリ

捧ぐさきハ兵法の抗言あり是れ弱冠の頃より剣術損法よりを
盡くしたりと云ども今きく人ハ勝んとを恐れ負ぬ工夫の外
他事なしとの心ぞこの男なて弘坊ハいつも傍き兵法あり
何流ぞと問へバいやとよ是ハ人ハ負ぬ無手勝流ありと答ふ
男云手勝あんハ腰に帯したる両刀ハ何の為ぞと云だト
侍云以心伝心の二刀ハ我慢此辞を切り悪気の萠を断あり
とつふ男のさぶ弘坊と仕あひをいさんハ手無くしく勝
たまうんやト侍我が心の剣ハ活人剣なれども対する人悪人なれ
バこの身殺人刀と成るとつふを男なもあず腹ハすを
ねて船人ハ向ひくひるハ此舟をいそぎ陸ハ着ハ平地
にく勝負を決せんと怒然き気色をく人怒り是バト侍

ひそふ同船の人々ハ人をなさせ船人ハ御國していひるハ陸
まてハ往還の巷にく観者の多くん人ハ妨あるべ下あの辛崎の
孤島こそまれとてぞ人ハ負ぬ手勝流の修練の多あく
を見参ハ人乗合の物ハ急ぎ此旅ハ行あるべおも
本末で押せく一神あれうとく船をいそぐせう此島ハ著く
こひとくの男三尺ハすの大刀をすりと接きたるち岸上
ハ飛ぐり弘坊の赤顔ニッハおさんいそぎあり人と罵り
見れバト侍者ぞく彼手人手勝流ハ心を静ふせねば
らぬとありとく畳を言くうげ腰の両刀をバ船人ハとら
すくありその水掉を我ハ出ハとくく船梁ハ三あり永
掉まて向ふ此岸へひくと飛ぶとえくぶさハ手ハとく

船をもとめの沖へつき出し、たりの男これを見ていふ小坊ハ
あぐりゆえぬやとゝバト侍いとよあぐりゆべき口をしくバみを
おもぎく来りたまへ一則さづけく引導せん急ぎ膝流ハ長ふ
ま事と言葉ハ笑ひ乞れバ男あまり此奢さふふ〳〵きこゑ〳〵
返せもどせとひ乞れぢもさ〳〵ハ空入ず湖ゆたるのうハ陽り
て扇をひろき招きつゝ出ちゞ乞ゆの袖振をバさゝめて殊勝
ハ物ふゞ〳〵執心あるゝぶ毛ゆく侍へん さぶ〳〵とひ拵〳〵山
田村ハつきゝろとあゝ書ハ足ゝゝ

風外禅師

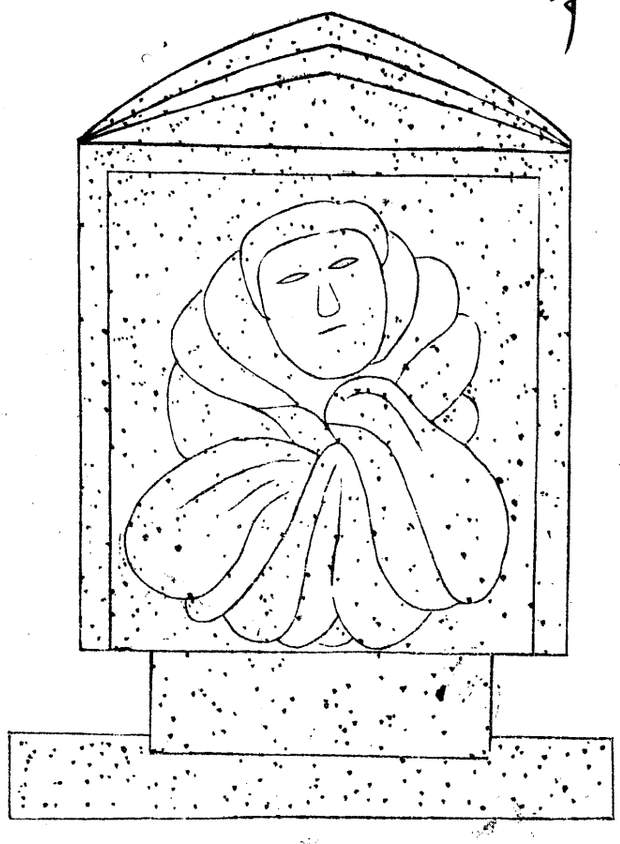
風外禅師ハ幼ときより勤修ゆ〳〵て如来金言の教を信じ経
論を諳〳〵長ゝあゝく難深〳〵俗塵を排ひさりて身を事

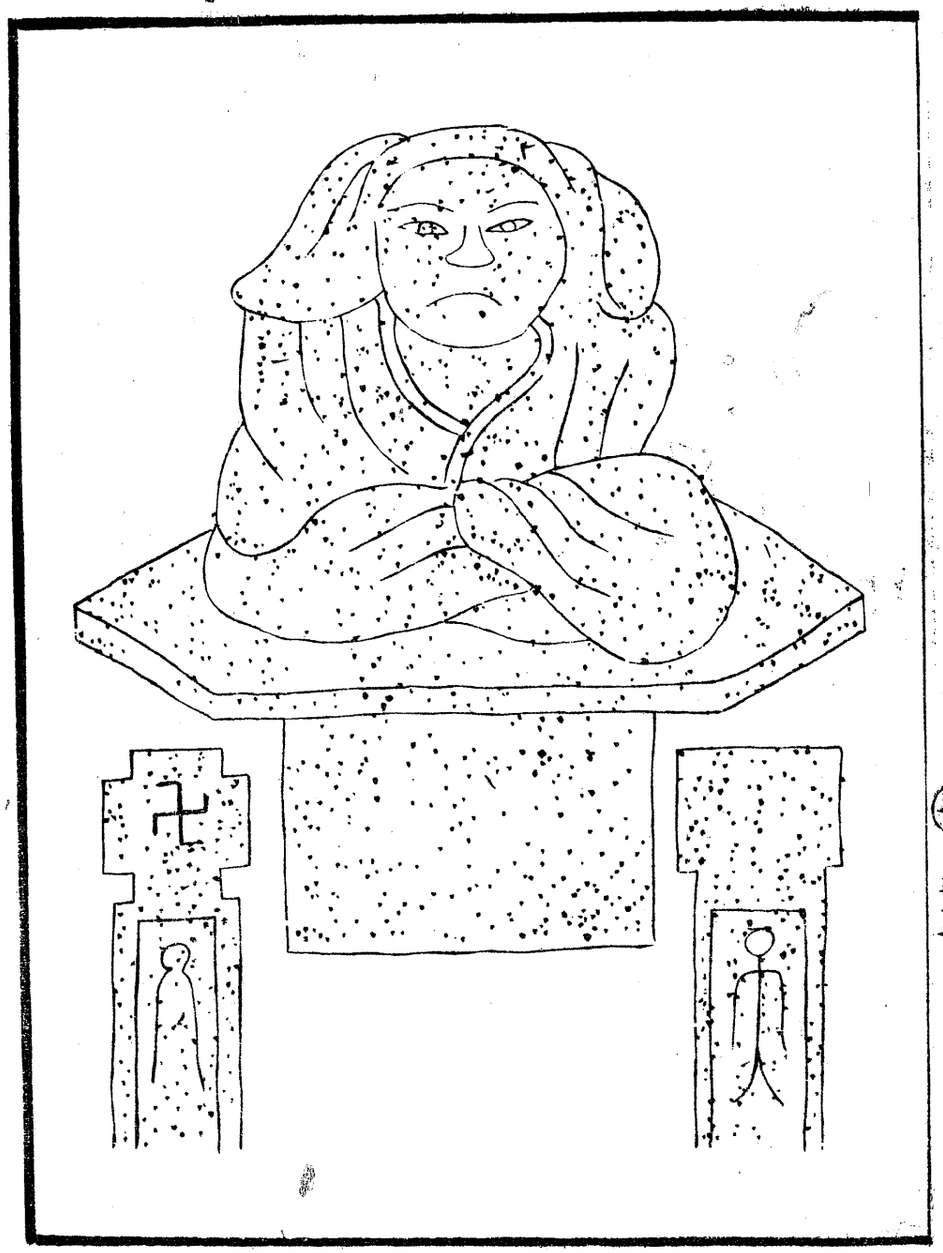
水ふまもゝて大悟の知識あゝと尋けバゝるゝ〳〵往〳〵参禅〳〵
この浮物外如高潤川和尚の禅師ハ渴〳〵て悟を徹底ゝ
たりとぞ周暇あきバ達磨大師ハ像を画き〳〵人ハあゝふそ
の著書ハ九ゆ超九みゝ〳〵奇絶〳〵小児軍求むゝ時ハ快く
ゝの高ゆハ廣〳〵て面ぐきあゝ大人あゝぐちふ通り乞ひ
ゆれバ唯笑て答ゝざるゆく世ハ風外の達人ゝとふ賞〳〵
玩ゞり おゆ曽我中村ハ住ゝ〳〵穴居せ〳〵ゝの穴居ゆ
あゝとゝハ存ゝり土人呼び〳〵風外穴ゝ〳〵ひゝ所ゆゞ寒
暖ハよゝ〳〵居を移せ〳〵とぞ後ふ箱根山中ハ一寺ハ仲菴
を結び住ゝ〳〵此山村へ托鉢ハ出るゝハ里民粗歳〳〵ゝを見
の袋とゆゝ石ひゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ日雨ハ降ゝ〳〵時根石河

石のいと大きなるを伊勢守頸に戴き両を割ぐ笠よう入て出られしを見て怪禅師の弱年は今あるぞを知て是より石を敬せしと云う者よ人伝を聞けて浄く白垂ようなれ石自父母の遺像を石よ彫刻し朝夕香華を供へ肉眼の恩を謝しうさてある府國の者小田原侯の此山中あり絶景の勝地を石こと精舎を造立して長興山と号し風外禅師を迎へて住持せんことを乞ひ請ひ乞ひて固辞しも肯ぜざりて黄檗の鉄牛和尚を招き開山とせりうくてあ

る日侯の鉄牛和尚を伴ひ風外禅師の州着よ訪れたる時鉄牛和尚の風外禅師よ問ひて曰く世を遁れて寂静よ修禅せんとこそねがへ〜なれと問ひうのをうう風外禅師答

世を遁るゝハいとやすし出家ハ成ぐるゝ名利よ法あぐれゝ衆ハ国原方服ふゝ心ハ在俗よ如とれ里まことふ世ハ穏安くゝたゝく修ぐきものぞうと笑て談畢をうす





さて次の日國北寺風外禅師を墓のあるところを尋ねて草庵を再び問ひしかども麻北衣布の義屋具世ばび物々の資和いさゝか遺ゝいづち行方知れず在をたづねよりて破稿笛と石像二軀を取り来りしとあり

美成三風外禅師が逢親の石像ハ今江戸筑地なるよりの由糸侯稲葉家北下邸ニ在りいつ糸なるよりより世上まて咳の老婆と称ゝ中ハ百日咳北形象を刻ゝ快気すり時ハ感謝ニ茶を煮ゝ呑ハ多向るよりこれハ貞享三年稲葉家越後へ國ゞの時領地中因糸よりこのみよ引き

移ゝとや

再掲ずゝ不一説ゝ風外禅師ハ武戸祇園寺の産
首ゝて四国巡禅師ゝ歴ひ播ゝ伊予ゝ住めり郭
境ハ江戸駒込寺ゝ住りそハ言葉寺の息山
和尚と風外禅師とハ方外の友ゝくゝの外親
密ゝてあり〻ゝれバ冬の間ハいつも言葉寺ゝ寄宿
〻夏ハ伊豆ゝ山中ゝ住ゝしゝ此寺ゝ寄宿のゝ
ハ人の物風ふゝとありゝとも芸ゝまでゝ和尚する
ゝもれゝ囲碁ゝを傍ゝ寄ゝ見ゝるのゝみゝぞ
されバこのゝちゝて遷化あり〻ゝ寄ゝ
聚室風外禅師 正徳三年正月十四
とありこの説ゝ石書あり風外禅師の附代ハ正

徒の法とハ足そくべ まこと心越禅師の法嗣といふも覚
つゝ有〳〵風外禅師の布袋ハ畫よ玄蘗十泉和
尚の賁舜のあるハもバ正徒よりハ高き人なるべ
辞を給ぶ〳〵知ぶ〳〵者ゝて ほの孝人をまろ
のく

吉益東洞

吉益東洞名ハ考則字ハ公言安藝の人なりそのもとハ管
領畠山政長の高家なり東洞年ゝ〳〵老気ありそのの
祖先の天下ハ名族なるをもゝ〳〵再び家を興さんとおもひ
乞法を尋び馬を馳せ叡を試ミ父祖の業を繼ぐべ年
已ハ長〳〵自ら〳〵老年の世武藝よ熟せりとを

その術を施すの日あ〳〵こゝハ於〳〵慨然〳〵〳〵天よ誓ひ
て云大丈夫まさハ良和とあるべずんハ必良医とあるべ〳〵
とて遂ハ医を学ぶんと ひ祖父畠山氏養名ハ政の門
人津林順といふ者あり金瘡産科ハ術を伝ふ是よよ
り東洞云懐孕ハ婦人の常なり金瘡ハ外傷ハり病ハあ
らぬ〳〵ハ藥ぶ〳〵て可なり病あれバ證よ従ひ〳〵療治す
べ〳〵何ぞ科を分つとをせん〳〵〳〵医ハ方ハんをひるめ年ご
ろ勉め〳〵ハ〳〵ハ遂ハ陰陽五行ハ腐説を廢〳〵吉薬
の張仲景を宗と〳〵て常よ云ハ萬病唯一毒衆藥皆
毒物なり毒をもゝ〳〵毒を攻ハ毒去れバ體ハ自健なり〳〵
めより元気を益扶すといふとあんやうれバ補といふと